

あさひきたる
朝輝記太留 (1878-1938) の米国体育視察と
行進遊戯教材の普及に関する研究

Kitaru Asahi's Inspection in the United States of America
and Promotions of Teaching Materials of Dance Education

廣 兼 志 保 : Shiho HIROKANE¹
木 原 成一郎 : Seiichiro KIHARA²

- 1 島根大学教育学部 : Faculty of Education, Shimane University,
1060, Nishikawatsu-cho, Matsue, Shimane, 690-8504
- 2 広島大学大学院教育学研究科 : Graduate School of Education, Hiroshima University,
1-1-1, Kagamiyama, Higashi-Hiroshima, Hiroshima, 739-8524

Abstract

This study aims to answer the following two questions.

Why and how Kitaru Asahi who was a physical education teacher was motivated to introduce new teaching materials of dance education to other physical education teachers in the latter period of the Taisho era to the early period of the Showa era (1921-1937) in Japan? And secondly, what were the new teaching materials of dance education that Asahi introduced?

The main results are as follows.

Asahi had some difficulties when he taught dance, because there were neither suitable teaching materials for girls in physical education, nor a concrete curriculum of dance education for girls. He decided to collect information, and study dance education.

Asahi went on travels of inspection for physical education and stayed in the United States of America from June 1918 to March 1919. He received lots of chances to collect and study new teaching materials during these travels. Asahi stayed at Sargent School of Physical Education in Boston from September to December in 1918. He mainly studied gymnastics and dance. Also he visited elementary schools, high schools, normal schools, physical education teacher training schools, colleges, universities and boards of education in each state or city. Therefore, he could collect a lot of information about physical education or dance education.

After returning from the United States to Japan, Asahi published teaching text books for dance education and introduced new teaching materials. These materials were classified as follows. These were folk dance, gymnastic dance, athletic dance, and aesthetic dance. Asahi introduced these teaching materials for solving the difficult problem that he had before his inspections.

I. 研究の動機及び目的

体育研究者・体育指導者達は、身体観や教育観の変遷とともに新たな体育観を導入し旧来の体育観を修正し拡張しようとしてきた。大正後期の体操科においては生理学的・解剖学的な理論に立ち富国強兵をめざした身体修練を志向する体育に対する批判として新たな体育観を導入しようとする動きが起こった(真行寺・吉原, 1928)。その一つに「体育を通しての美育」がある。これは、体育を通して身体そのものの美や姿勢・動作の美、運動を通して経験される美的感情を学習者に育てようとした体育研究者の主張である(茅原, 1922, 1923, 荒木, 1923, 富永, 1923, 富田, 1924)。この主張に従えば、体操科は強く健康な肉体の実現をめざす生理学的・解剖学的な身体訓練だけでなく、運動の快さや身体の姿勢・動作の美的な意味や価値をも教育内容に含むことになる。それらの理念を典型的に体现したのが体操科の遊戯領域におけるダンスの教育である。

これに先立つ明治40年代(1907 - 1916年)は、桂内閣の下、教育政策においても「硬教育」の空気が高まっていた。その状況下で、ダンスの教育は軟弱・浮薄の弊風を助長するものとみなされ、非難と抑圧の対象となっていた(竹之下・岸野, 1959)。そのような抑圧を経てなお、体育指導の現場に立つ教員の中には、当時の体操科の基本理念を尊重しつつ、人体の生理解剖及び心理学の原則に基づき教育的立場に立って、新たなダンス教材を組織し改革しようとしていた人々があつた(松本・安村, 1983)。

大正8(1918)年以降、これらの新教材が次々に紹介され、教員を対象とする研究会や実技講習会で伝達されるようになり、次第に全国に普及していった。大正15(1926)年と昭和11(1936)年の二度にわたる学校体操教授要目の改正では、その都度、これらの新教材が新たに採用され、遊戯領域におけるダンスの教材が増加し、遊戯領域のカリキュラムは分化され整理されるに至る。

一方、体育教材史研究の動向に目を転じると、大正後期から昭和初期の体操科の教育内容や教材の改革を題材とした研究において、遊戯領域一なかでもダンスーに関する領域の改革を題材とした研究は、管見の限りでは、あまり蓄積がない。ダ

ンスに関する領域は、唱歌遊戯と行進遊戯に大別される。唱歌遊戯を対象とした教材史研究は、幼児教育の分野で蓄積があるが、行進遊戯を主な対象とした研究は少なく、今後の解明が待たれる。

ところで、当時の体育指導の現場に立つ教員達は、どのような動機で、何を契機に、どのような教材を紹介したのだろうか。それらの教材はどのような過程を経て学校体育に普及し、学校体操教授要目の改正を通してカリキュラムを改革するに至ったのだろうか。

これらの疑問に答えるためには、大正後期から昭和初期のダンス指導書にみる教材の変遷や、指導に携わる教員のダンス教育に対する言説及び活動を明らかにし、新教材紹介の動機と契機及び紹介された教材の実際を解明することが必要となる。

昭和3(1925)年に発表された寺岡英吉による論説「体育ダンスの発達と女子体育(四)」によれば、「大正八年以後に於ける我国女子体育の発達は特筆大書すべきでありまして、真に眼がましい進歩を来したのであります」とあり、その例として「約一ヶ年体育ダンスを研究してアメリカから帰朝した朝輝氏が、各地の講習に出張してこれが普及に努力すると共に学校体育の新教材を公刊しました」(寺岡, 1925, p.5)と紹介されている。当時の体育指導者の中で、新教材普及の端緒をひらく役割を担った人物として、朝輝記太留の存在が浮かび上がってくる。

そこで本研究は、米国体育視察の見聞を基に、高等女学校の体育教員として新教材を紹介した代表的な先駆者として朝輝記太留を取り上げる。本研究の「4. 朝輝の著書にみるダンス教材の概要」に示すように、朝輝の教育実践は、明治30年代(1897 - 1906年)から昭和11年の学校体操教授要目第2次改正に至る行進遊戯教材の変遷を如実に反映している。体育教員としての朝輝の教育実践の軌跡をたどることにより、大正後期から昭和初期の行進遊戯の教材史研究の進展を試みたい。

朝輝は、明治33(1900)年から昭和13(1938)年までおよそ40年間体育教員として体育指導に携わっていた。彼は勤務校である私立大阪樟蔭高等女学校より9ヶ月の米国体育視察を命じられた。これは当時の我が国の中等教育学校教員と

して殆ど類例のないことであったという(朝輝, 1921a, はしがき p.3)。朝輝は、私立学校の教員であったためより自由に先進的な教育実践を試みることができる立場にあった。彼は先駆者としての使命と責任を強く自覚しつつ視察へ旅立った(朝輝, 1921a, はしがき p.3)。帰国後の朝輝は、高等女学校の体育教員という立場から日本の女子体育指導における実務上の改善点を把握したうえで、直接見聞した海外の多様な舞踊の運動形式とそれを支える体育理論を紹介し、生徒の心情や運動能力にふさわしく実際に授業で指導することが可能なダンス教材を全国各地に普及させることに尽力した。

現在、朝輝に関する研究は、白川(2006, 2007)が、樟蔭高等女学校及び女子専門学校での教育活動と朝輝が出版した「体育ダンス」指導書の概要について明らかにしているのみである。

本研究は、朝輝が遊戯領域、特に行進遊戯領域の新教材を紹介した動機と契機及びその教材の実際を明らかにすることを目的とする。その際、朝輝の米国体育視察に着目し、その概要を明らかにしたうえで、視察におけるどんな経験から教材改革のための示唆を得たのかについても考察する。

II. 研究の方法

- <1> 朝輝の経歴を明らかにしたうえで朝輝の日記『米国体育視察記』を講読し、米国視察の概要を明らかにする。
- <2> 『米国体育視察記』の記述及び体育専門雑誌に執筆した朝輝の論説を手がかりに、新教材導入に関わる朝輝の動機を考察する。
- <3> 朝輝が執筆したダンス指導書及びダンス指導に関する雑誌記事を収集し、大正7(1918)年から同8年にかけての米国体育視察以前に執筆されたものと帰国後に執筆されたものに分類する。そして米国視察以前と帰国後の著書に取り上げられた教材の相違を明らかにする。
- <4> 米国体育視察の影響が顕著に表れている朝輝の著書『学校体育の新教材』と『体育的学校ダンス』で紹介されたダンス教材の原典を探り、朝輝がどんなダンス教材を新教材として移入したかを明らかにする。

朝輝は『学校体育の新教材』で、体操・競技遊戯・行進遊戯の3領域の新教材を紹介している。その原典として米国の体育指導書10件をあげているが、本研究では、それらの原典のうちダンス指導書を収集することとし、朝輝が使用した5件のダンス指導書のうち4件を収集することができた。その内訳は、以下の①～④である。

- ① Elizabeth Burchenal, C.Ward Crampton (1908) Folk dance music. G.Schirmer
- ② C.Ward.Crampton (1909) The folk dance book. A.S.Bames
- ③ Elizabeth Burchenal (1913) Dances of the people. G.Schirmer
- ④ James Claude Elsom, Blanche Mathilde Trilling (1919) Social games and group dances. J.B. Lippincott

これら①～④に掲載された教材と、『学校体育の新教材』及び『体育的学校ダンス』に掲載された教材とを照合し、朝輝がどの指導書からどのダンス教材を翻訳したかを探る。

III. 結果と考察

1. 朝輝記太留の経歴

白川(2007)により、朝輝記太留の経歴は以下のように明らかにされている。朝輝記太留は明治11(1878)年5月14日に京都府加佐郡河守上村(現福知山市大江町)で出生した。明治33年に小学校の訓導として教職に就いた後、明治37(1904)年の日本体育会体操学校高等本科卒業を経て、高等女学校の教諭及び女子専門学校の教授を歴任した。彼は昭和13年5月28日に60歳で死去するまで学校体育指導者として教育実践に携わった(白川, 2007, pp.214-215)。

米国体育視察後の朝輝は、勤務校での授業実践の傍ら国民体育会会員(国民体育会, 1919, p.66)・学校遊戯研究会顧問(学校遊戯研究会, 1925, 表紙裏)・大日本体育遊技研究会顧問(体育学会, 1934, 巻頭)として各研究会が発行する機関誌へ論説や教材の紹介記事を執筆したり、全国各地で開催された学校教員向けの講習会の講師を精力的に務めるなど新しいダンス教材の紹介と普及に尽力した。彼は同時代の体育研究者からも「体育ダンス^{注1)}」の普及発展に貢献した人物であると評価されて

表1 朝輝記太留の略年表

年	月	年齢	朝輝記太留の教育活動事項
明治11(1878)年	5月		14日に京都府加佐郡河守上村(現福知山市大江町)にて出生
明治32(1899)年	7月	21歳	京都府師範学校卒業、京都府尋常小学校本科正教員免許状取得
明治33(1900)年	?月	22歳	京都府加佐郡俊明尋常小学校に訓導として勤務
同	?月		陸軍六週間現役兵として勤務
明治35(1902)年	5月	24歳	京都府小学校体操科正教員免許状取得
明治36(1903)年	9月	25歳	日本体育会体操学校高等本科に入学
明治37(1904)年	1月	25歳	同卒業
同	?月		師範学校・中学校・高等女学校体操科教員免許状取得
明治37(1904)年	?月		京都市立第二高等小学校に訓導として勤務
明治38(1905)年	?月		京都府立第二高等女学校に教諭兼京都市立第二高等小学校訓導として勤務
同	11月	27歳	『瑞典式体操』出版
明治39(1906)年	3月	同	『凱旋舞』出版
明治41(1908)年	?月		神戸市兵庫尋常小学校訓導として勤務
明治42(1909)年	1月	30歳	『六箇年小学校新遊戯法』出版(共著者・早坂留平治,前田桂仙)
明治43(1910)年	9月	32歳	大阪府立夕陽丘高等女学校に教諭として着任
同	12月	同	『小学読本唱歌適用遊戯法』出版(共著者・中野篤一郎)
大正7(1918)年	3月	39歳	大阪府立夕陽丘高等女学校退職
同	4月	同	大阪樟蔭高等女学校に教諭として着任
同	6月	40歳	大阪樟蔭高等女学校からの派遣により米国体育視察に出発
同	9~12月	同	ボストン サージェントスクールに留学、体育の授業を受講。同時に市内及び近郊の女子ハイスクール・女子大学・大学・師範学校・体操教員養成学校を参観・視察、教育課体育主任を訪問
大正8(1919)年	1~3月	40歳	各都市の小学校・女子ハイスクール・女子大学・大学・師範学校・体操教員養成学校・舞踊学校を参観・視察、教育課体育主任を訪問
同	2月	同	サンフランシスコ邦字新聞(2月16日付)に朝輝の談話記事掲載 日米「故国女子体育の難関」、新世界「矛盾だらけの日本女子体操」
同	3月	同	帰国
大正10(1921)年	6月	43歳	『米国体育視察記』出版
同	6月	同	『学校体育の新教材』出版
大正13(1924)年	8月	46歳	『体育的学校ダンス』出版
大正15(1926)年	4月	47歳	大阪樟蔭女子専門学校設立・体育主任教授就任
同	?月	?歳	『行進遊戯新教本:改正要目準拠』出版
同	4月	同	『体育的学校ダンス』改訂版出版
同	7月?	50歳	『御大典奉祝記念行進遊戯 菊の薫』出版
昭和4(1929)年	7月	51歳	『扶桑行進』山田騰写真版出版
同	8月	同	映像記録「体育行脚 台湾編」台湾師範学校・台南第二高等女学校・台南花園小学校・台北第一高等女学校訪問の記録
同	同	同	映像記録「体育行脚 沖縄編」沖縄師範学校・沖縄女子師範学校訪問の記録
昭和5(1930)年	7月	52歳	『扶桑行進』青々書院版出版
同		同	『体育ダンス 敷島行進』出版
昭和12(1937)年	5月	59歳	『唱歌遊戯・行進遊戯新教本 上中下巻』出版
同	9月	同	病気のため休職
昭和13(1938)年	5月	60歳	28日 死去
			日本山岳会会員
			国民体育会会員
			大日本体育遊技研究会顧問
			学校遊戯研究会顧問

いる(真行寺・吉原, 1928, pp.655-656, 寺岡, 1928, p.5)。

2. 米国体育視察の概要

朝輝記太留は、大正7年4月の大阪樟蔭高等女学校設立と同時に、同校に体操科担当教諭として着任し、その2ヶ月後、校命により大正7年6月から大正8年3月まで9ヶ月間米国へ体育視察に派遣された(白川, 2007, p.215)。本研究では、この視察を朝輝の教育実践における転機^{注2)}とみて、その概要や、視察により得られた新教材及び教材収集の背景にある動機を探っていく。

朝輝は著書『米国体育視察記』に視察の詳細を記録している。以下、本項では『米国体育視察記』の記述をもとに視察の概要について明らかにする。

同書によると、朝輝は米国視察において、学校教育諸施設・社会教育諸施設・社会福祉施設等を積極的に視察していた。彼は滞在期間中、のべ19カ所の都市を訪問し、96カ所の学校教育諸施設(そのうち13カ所は各州または市の教育課)を視察または訪問している(朝輝, 1921a)。彼の訪問先と訪問回数を表2に示す。

表2から、朝輝が初等教育から高等教育までの各学校種をくまなく訪問していること、また、体育や舞踊の専門的な教育を行っている学校を訪問していることがわかる。とりわけ、中等教育学校及び高等教育機関は女子校または女子部を中心に訪問していた(朝輝, 1921a, p.89, pp.132-247, pp.294-295, pp.297-298, pp.301-303, p.342, p.347, pp.348-349, p.352, p.358)。視察への派遣時期が勤務校の創設直後であったこと、訪問先から学校案内のパンフレットや卒業アルバムなどを分与してもらっていたことを考えると、これらの訪問は勤務校の経営のための参考資料収集という意図もあったであろうことが推測される。

朝輝が拠点校として9月～12月までの1学期間滞在し、実技を中心に在學生とともに授業に参加したのは、ボストンのサージャントスクール(Sargent School of Physical Education)であった^{注3)}。これは、当時東京高等師範学校教授であった可児徳の紹介によるものである(朝輝, 1921a, p.18, 162)。朝輝は、それまで女子体育を専門に研究し指導し

表2 訪問先の種別と訪問回数

訪問先の種別	校数	回数
演劇学校	1	3
寄宿学校	1	1
教育行政	13	16
高等学校(共学)	8	8
高等学校(別学か共学か不明)	8	8
師範学校(共学)	1	1
師範学校(別学か共学か不明)	4	4
小学校	15	15
女子グラマースクールと女子高等学校との併設校	1	1
女子高等学校	5	14
女子師範学校	4	65
女子職業学校	1	1
女子大学	5	5
女子体操専門学校	1	1
体育学校(共学)	1	1
体育教員養成学校(男子校)	1	1
大学(共学)	14	19
大学(女子部)	2	2
大学(男子校)	1	1
体操学校(共学)	1	1
日本語補習学校	1	1
日本語補習学校(小学校)	1	1
補習学校(小学校)	2	3
舞踊学校	2	6
幼稚園	2	2
合計	96	181

ていた経歴と、女子の体育教員養成学校であるサージャントスクールでの研究を希望していたことにより、特別に受け入れを許可された(朝輝, 1921a, p.156)。当時、サージャントスクールは3年間の教育課程を有していた。朝輝は同校にのべ50回通い、第1～3学年の授業に参加・参観し、学生と一緒に体操とダンスの実技クラスを中心に授業を受講した(朝輝, 1921a, pp.163-242)。

ボストンには、アメリカの体育教員養成草創期に設立されたサージャントスクールの他にも、ボストン体育師範学校(Boston Normal School of Gymnastics)、ポッセ師範学校(Posse Normal School)といった私立の体育教員養成学校があり、

日本人体育研究者らの留学を受け入れていた。朝輝が渡米した大正7年当時、ボストン体育師範学校はウェレズレー女子大学と合併し移転していたが(ベネット, 1976)、彼はウェレズレー女子大学にも参観に訪れている(朝輝, 1921a, pp.212-217)。朝輝はポッセ師範学校にもものべ10回通い、同様に体操・ダンス・ゲームの授業に参加・参観した(朝輝, 1921a, pp.189-234)。他に当時の米国の代表的な体育教員養成学校であるスプリングフィールド基督教青年会体育専門学校(Y.M.C.A. College Springfield)やアマースト大学(Amherst College)も朝輝は視察している(朝輝, 1921a, pp.225-229)。

これらの視察の間、在ボストン日本人学生秋季大会に参加する(朝輝, 1921a, pp.188-189)など朝輝は様々な分野の日本人留学生達と交流し、見聞した情報や意見を交換していた。また、当時シカゴ大学に留学中の大谷武一やボストン留学中の岡部平太らの体育研究者とも交流していた(朝輝, 1921a, p.122, 131-132, 134-135, 158-159)。

また、朝輝はボストン市教育課の紹介により、市内のハイスクール、特にガールズハイスクールや小学校を訪問し、授業や施設を参観したり、市教育課の体育指導の方針を尋ねたりした他(朝輝, 1921a, p.172, pp.245-246)、サージャントスクールで開催されたボストン体育協会(Boston Physical Education Society)の総会に出席し、アメリカの学校体育の実態把握に努めた(朝輝, 1921a, p.233)。また、彼は訪問地の学校が採用している体育の指導書や伴奏音楽の楽譜を収集した。音響機器や伴奏音楽のレコードに関する情報も含め、授業実践に必要な情報に関して精力的に収集を行っていた(朝輝, 1921a, p.165, 167, 174, 223, pp.232-233, p.285, 359)。

朝輝は西海岸のサンフランシスコに上陸後、鉄道を使用して東海岸のボストンへ移動した。彼は、往路の途中に立ち寄った都市で様々な校種の学校を訪問し、体育施設を中心に学校の施設・設備を参観したり体育の授業を参観したりしている(朝輝, 1921a, pp.53-125)。12月にボストン滞在を終えた後も、同様に鉄道で大陸を横断しサンフランシスコへ向かう復路で様々な都市に立ち寄り、各都市の学校参観や体育行政の現状についての聞き取り調査などを行った(朝輝, 1921a, pp.269-368)。

サージャントスクールを去る時、校長のサージャントと主任教師のスコラーダーは、帰途に視察すべき各都市の大学、体操学校、師範学校、体育課の責任者や研究者宛の紹介状を作成し朝輝に手渡した(朝輝, 1921a, pp.240-241)。彼はその紹介状により各機関を訪問することができた。また、朝輝が日本帝国外務大臣から与えられた旅券には教育視察のための渡航と明記されていた^{注4)}ので、それにより各都市や州の教育課や体育課から現地の教育機関や体育施設の紹介を受け視察を行うことができた。

彼は、各都市の中でもニューヨークには2週間程度滞在し、ニューヨーク市体育課のクラプトンとも面談しているが、朝輝は「同氏の体育に対する抱負を聞き大に啓発さるゝ点があつた」と記している(朝輝, 1921a, p.269)。帰国後の朝輝はクラプトンの著書から様々なダンス教材を翻訳し、それらの国内に於ける普及活動に尽力している。

その他、朝輝はアメリカの学校体育におけるダンスの普及に尽力したチャリフが主催する舞踊学校^{注5)}やショーダンサーを養成する演劇学校にも通って授業を参観したり(朝輝, 1921a, p.267, pp.271-272, 274-275, 284)、ブロードウェイの劇場に足を運び、ダンスを鑑賞したりしている(朝輝, 1921a, p.268)。また、滞在地の日本人が下宿している現地家庭での社交ダンスを見物したり(朝輝, 1921a, pp.174-175)、帰国途上の船内で開かれていたダンスパーティーに通って様子を見物したりするなど(朝輝, 1921a, p.363, 365, 369, 372, 374)、様々な種類のダンスを積極的に見聞していた。後年、朝輝は論説文中で様々なダンスの分類について解説しているが(朝輝, 1922b, c, d)、滞米中に様々なダンスを見聞した体験も参考にされているのではないと思われる。

3. 米国体育視察前の体操科における行進遊戯の状況と、視察に対する朝輝の動機

朝輝は、著書の序文や体育専門雑誌の論説に、米国体育視察前の体操科における行進遊戯の状況や、視察にあたっての動機を記している。

「文部当局一部の人士は、其当時学校にて行ふ処の行進遊戯が、軽佻浮薄の思想を醸成するも

のなりとの理由の下に、其実施に対して抑圧を加え、最近拾数年間に建設された一教科を殆ど根絶せしめんことを勸(つと)めたり(中略)。斯くの如く一時隆盛なりし行進遊戯は明治四十三四年を一期として跡方なく我が教育界より消失し、僅かに比較的これに興味を有し聊か造詣ある体操教師の勤務せる女学校の一部分にのみよりて、其命脈を保存せられたり。予身を学校体育に献げてより茲に二十余年間、幸か不幸か専ら女学校に職を奉じ、如上の経験に親しく遭遇せしも、女兒の体育教材としては、殊に現代の如き過渡期にある我国の一体育法として、単にフォーマルな体操のみにては不十分なるを認め、不肖なりと雖も之が研究と実施を継続し来れり」(朝輝, 1922b, p.37)

明治期の行進遊戯領域は、19世紀に上流階級の間で踊られていたコチロンヤカドリールなどの社交ダンスを中心的な教材としていたが(村山, 2000)、上記の朝輝の指摘によれば、これらの教材の指導は文部当局の抑圧により明治43(1910)年頃を境に衰退したという。しかしながら、当時の学校体育の中心領域であった体操の指導だけでは女子の体育教材としては不十分であると考えていた朝輝は、行進遊戯の教材研究と指導実践を継続してきた。

ところが、大正8年までは行進遊戯の教材研究はさしたる進歩が見られず(寺岡, 1928)、大正2年に制定された学校体操教授要目にも「女兒に課すべき行進遊戯といふ名目丈けはあるが、偕(さて)其行進遊戯は何を課すかといふことは全然明示されてなかつた」(朝輝, 1927a, p.21)。このため、朝輝には「雲をつかむやうな無方針」(朝輝, 1927a, p.22)であると感ぜられていた。

「二階堂女史の英国留学を了へて帰朝されてより、曲線運動等と題して諸種のダンスを教授せられて、稍復活の燭光は認められしが、この技多くは部分的の歩法にして、纏まりたるもの少なく、而も之に伴ふ楽曲を発表されざるにより、之を課するに折角の教材も音律より受くる快感の欠除さるゝは実に遺憾とする処にして、更に付随さるべき適當の楽曲なきは一般教育界に普

及の遅延を余儀なくされたるは惜しむべきことゝいふべし」(朝輝, 1922b, p.37)

そうした状況下で新たな教材が移入されても、まとまったダンス作品になっている教材が少なかったり、ダンスの動きや構成にふさわしい伴奏音楽がなかったために、実際の学校現場では指導しにくいという問題があった。このため、教材の普及が遅れたと、朝輝は指摘している。

このように、授業実践のための教材選択に苦心していた朝輝は、米国体育視察を機に、行進遊戯の教材を収集し、教育実践を改革することを決意する。

「大正七年校命にて米国体育の視察研究するに先ち、素より彼の地に於ける諸種の体育方法はいはずもがな、就中拾数年間教材の選択上常に苦心を免れざりし行進遊戯の材料は、我が国情に抵触せざる範囲内に限り、汎く之を研究蒐集せんことを企図し、七月米大陸へ足跡を印してより、翌八年を試みたり」(朝輝, 1922b, p.37)

この決意が、積極的に視察先を訪問し、教材や情報の収集に努めた朝輝の行動の原動力となっていたと推察できる。

「是によりて之を視れば、米国学校体育界に於けるダンスの実際は、素より彼我国情を異にするとはいへ、到底我が国の夫れに比し実に月鼈の相違といふべく、単に他山の石として望観すべきにあらず、大いに其長を採り我が短を補ふは目下の急務なりといふべし」(朝輝, 1922b, pp.37-38)

視察によって得た先進的な教材を積極的に取り入れることによって、教育実践の改革をはかろうとしていたことがわかる。

では、朝輝の教育実践は視察前後でどのように変化したのだろうか。彼が著書に示した教材を比較することで、史実の一端を明らかにしたい。

4. 朝輝の著書にみるダンス教材の概要

(1) 米国体育視察前後のダンス教材の比較

朝輝は11冊の著書を出版しているが、その殆どはダンス関係指導書である。これらの指導書に示された教材を、種類別に分類した結果を表3に示す。米国視察以前の朝輝が著したダンス関係指導書には、行進運動・社交ダンス・唱歌遊戯の教材が取り上げられていた。一方、帰国後の大正10(1921)年以降の指導書では、それらに加えて、米国から移入したフォークダンス、ジムナスティックダンス(身体の鍛錬を目的とした運動量の多いダンス)、アスレティックダンス(競技の動作をダンスに構成したもの)、エセティックダンス(バレエの基本姿勢や動作及び社交ダンスのステップを用いて美的に構成したダンス)が取り上げられている。帰国後はより多彩なジャンルから活発な運動を含む教材が採用されるようになったことがわかる。

また、彼は明治39(1906)年に『凱旋舞^{注6)}』、大正10年に『日本アルプスマーチ』といった自作教材を発表しているが^{注7)}、それらはいずれも外国から移入したエセティックダンスの作品やフォークダンスを改作したものであった。しかし、昭和3(1928)年以降には外国の教材を翻訳するだけでなく、フォークダンスやエセティックダンスに含まれるステップや身体技法を用いて独自のダンス教材を創作し発表するようになる^{注8)}。

(2) 『学校体育の新教材』『体育的学校ダンス』に紹介されたダンス教材の出典

表3に示された朝輝の著書のうち、帰国後に出版された指導書に着目したい。帰国後に出版されたのは、『学校体育の新教材』『体育的学校ダンス』『行進遊戯新教本:改正要目準拠』『御大典奉祝記念行進遊戯 菊の薫』『扶桑行進』『体育ダンス敷島行進』『唱歌遊戯・行進遊戯新教本 上・中・下巻』の7件である。このうち、『御大典奉祝記念行進遊戯 菊の薫』『扶桑行進』『体育ダンス敷島行進』は自作のダンス作品の解説書であり、『行進遊戯新教本:改正要目準拠』は大正15(1926)年改正の学校体操教授要目に採用された行進遊戯教材の解説書である。また、『唱歌遊戯・行進遊戯新教本 上・中・下巻』は昭和11年の第二次改正学校体操教授要目の行進遊戯教材を解説する

表3 朝輝の著書にみるダンス教材の分類

書名	出版年	カテゴリーごとの教材件数								合計件数
		瑞 典 体 操	行 進 運 動	社 交 ダ ン ス	唱 歌 遊 戯	フ ォ ー ク ダ ン ス	ジ ム ナ ス ティ ック ダ ン ス	ア ス レ ティ ック ダ ン ス	エ セ ティ ック ダ ン ス	
瑞典式体操	明治38 (1905)年	1	0	0	0	0	0	0	0	1
凱旋舞	明治39 (1906)年	0	0	0	0	0	0	1	0	1
六箇年小学校 新遊戯法	明治42 (1909)年	0	15	14	0	0	0	0	0	29
小学読本唱歌 適用遊戯法	明治43 (1910)年	0	0	0	10	0	0	0	0	10
学校体育の新 教材	大正10 (1921)年	0	0	0	0	15	0	2	0	18
体育的学校ダ ンス	大正13 (1924)年	0	0	0	0	28	0	3	3	35
行進遊戯新教 本:改正要目 準拠	大正15 (1926)年	0	2	4	0	2	0	0	1	9
体育的学校ダ ンス 改訂版	昭和3 (1928)年	0	0	0	0	30	0	3	4	38
御大典奉祝記 念行進遊戯 菊の薫	昭和3 (1928)年	未入手のため不明								
扶桑行進 山田謄写堂版	昭和4 (1929)年	0	0	0	0	0	0	0	1	1
扶桑行進 青々書院版	昭和5 (1930)年	0	0	0	0	0	0	0	1	1
体育ダンス 敷島行進	昭和5 (1930)年	未入手のため不明								
唱歌遊戯・行 進遊戯新教本 上巻	昭和12 (1937)年	0	0	0	2	3	0	0	0	5
唱歌遊戯・行 進遊戯新教本 中巻	昭和12 (1937)年	0	0	1	2	3	0	0	2	8
唱歌遊戯・行 進遊戯新教本 下巻	昭和12 (1937)年	0	0	2	2	1	0	0	3	8

表4 朝輝の著書に掲載された教材と原典との比較

教材名(和文表記は原著のまま)		書名(左欄の教材が掲載されている書名に○を付す)					
教材番号	朝輝の著書の中で出典が明らかになった教材には*を付す	学校体育の新教材	体育的學校ダンス	①Folk dance music	②The folk dance book	③Dances of the people	④Social games and group dances
1	エース オブ ダイアモンド	○*	○*	○	○		
2	アスレティック ダンス		○				
3	バアン ダンス フォーア スリー		○*				○
4	プレーキング	○*	○*	○	○	○	
5	チルドレンスポルカ	○*	○*	○	○		
6	サークル ダンス		○*				○
7	クラブダンス	○*	○*		○	○	○
8	チエボガー	○*	○*				○
9	ダンス オバー ゼアー		○				
10	ダンス オブ グリーディング	○*	○*	○	○		○
11	ダンス オブ サンビームス		○				
12	フレンチ リール	○*	○*				○
13	ハンセル エンド グレーテル		○				
14	ハーベスト フローリツク		○				
15	ハイランド ホッピング	○*	○*	○	○		
16	ハウ ドウ ユウ ドウ	○*	○*				○
17	ジヤンピング ジヤツク ダンス		○				
18	ジャンプ ジム クロウ	○	○				
19	カマリンスカイア	○*	○*		○		
20	ケテー ダンス		○				
21	ラツシース ダンス		○				
22	メーボール ダンス		○*	○			
23	ニグロ ダンス	○	○				
24	ニッポン アルプス マーチ	○*	○*				
25	リープ ジー フラックス	○*	○*		○		
26	リボン ダンス		○*			○	○
27	リング ダンス		○*		○		○
28	コサツク ダンス		○*	○	○		
29	シューメーカーダンス	○*	○*	○	○		
30	セント パトリックステデー		○*	○			
31	スキデイツシュ ポルカ		○*		○		
32	タントリー	○*	○*	○	○	○	
33	チャイムス オブ ダンカーク	○*	○*	○	○		
34	ジー ノーブルマン		○				
35	オックス ダンス		○*		○		
36	ワッシング ジー クロス	○*			○		
各書に掲載された教材について	教材の件数	18	35	11	16	4	9
	文献①との重複件数	8	11				
	文献②との重複件数	12	15				
	文献③との重複件数	3	4				
	文献④との重複件数	5	9				
	『学校体育の新教材』と『体育的學校ダンス』との重複件数	17					
	文献①との重複件数		3	『体育的學校ダンス』のみに掲載された教材18件について			
	文献②との重複件数		4				
文献③との重複件数		1					
文献④との重複件数		4					

ための、高等女学校生徒向けの教科書である（飯塚, 1938）。

よって、朝輝の著書のうちでも米国体育視察の影響が顕著に表れているものは、帰国1年後の大正10年に出版された『学校体育の新教材』と大正13（1924）年に出版された『体育的学校ダンス』であるといえる。

そこで、この2件に紹介されたダンス教材の原典を探り、朝輝がどんなダンス教材を新教材として移入したかを明らかにした。その結果、表4に示すようなことがわかった。

『学校体育の新教材』で、行進遊戯教材として紹介されているのは合計18件である。そのうち、出典が判明したのは16件のフォークダンスであった。これらのうち、① Folk dance music (Burchenal & Crampton, 1908) から8件、② The folk dance book (Crampton, 1909) から12件、③ Dances of the people (Burchenal, 1913) から3件、④ Social games and group dances (Elsom & Triling, 1919)（以下、①②③④と省略）から5件が翻訳され『学校体育の新教材』に掲載されていた。これらの教材には、①～④の間で重複して掲載されているものが9件含まれている。なかでも「プレーキング」は①と②と③、「クラップダンス」は②と③と④、「ダンスオブグリーティング」は①と②と④、「タントリー」は①と②と③に重複して掲載されており、これらの4件は、米国内でも広く普及していた教材であろうということが推察できる。

『体育的学校ダンス』では、35件のダンス教材が紹介されているが、そのうち17件は『学校体育の新教材』で紹介された教材と共通のものであり、新たに紹介されている教材は18件であった。このうち、9件のフォークダンスの原典が明らかにできた。①から3件、②から4件、③から1件、④から4件の教材がそれぞれ翻訳され掲載されていた。①～④の間で重複して掲載されているものは3件あった。

5. 朝輝記太留の新教材導入の動機

朝輝は、米国体育から移入したダンス教材のどのような点に着目し、従来の行進遊戯教材の欠点を補うための新教材として体育ダンスを導入した

のであろうか。

「以前我が国にて隆盛なりし行進遊戯の教材の性質は、其大多数が動作緩慢にして運動量少なく、殊に方舞の如きに到りては今日より之を見れば殆ど病人の散歩せるが如き感があるも、米国に実施せる多くのものは、児女の天性に合致すべき快活なる法歩（ママ）を主とし更には是等の動作にふさはしき楽曲をもつてせるにより、知らず識らず其旋律より受くる爽快なる感情と融和し比較的的自由の中に体操によりて練習し得られざる小筋肉をも修練し、以て弾力ある身体を作る一助とせるが如し、素より体操科の一教材として課するものなる（後略）」（朝輝, 1922b, p.39）。

まず朝輝が着目したのは、教材に含まれる運動の種類と質である。従来の行進遊戯教材は歩行を中心とし動作が緩慢なのに対して、朝輝が新教材として紹介したダンスは、軽い跳躍や回転が取り入れられたり、ホップやスキップやギャロップといったシンコペーションやアクセントのある快活な歩法（ステップ）を中心として運動が構成されたりしている。このような快活ではずむような運動は子ども達の天性とも合致すると彼は指摘する。

そして、彼は伴奏音楽に着目している。快活な動作にふさわしい軽快な伴奏音楽によって踊ることによって、自然と学習者の内に爽快な感情が生じるとともに、音楽のリズムと学習者の身体の動きとが一体となると彼は説明する。

また、単に教材を紹介するだけでなく、朝輝は「学校遊戯の教授細目的配当」を発表した。これは、小学校の学年と年齢に応じてダンス教材を配当した表である（朝輝, 1922a, pp.27-29）。「何を行進遊戯教材として課したらいいかわからない」という問題点の解決策を示したものであるといえる。この配当表は米国視察時に面談したフィラデルフィア市の体育主任スターチャーから紹介された著書 Games and Dances を翻訳したものであった。

IV. 結論

以上みてきたことから、朝輝記太留は、米国体

育視察を契機に、行進遊戯領域におけるダンス教材の紹介と普及に取り組むに至ったということがわかった。以下に、本研究により明らかになったことをまとめる。

朝輝は米国体育視察において、以下の4点の体験を通して得られた知見をもとに、1910年代の米国の体育で普及していた教材を、著書の出版を通して全国へ紹介した。

- ① 様々な教育機関を訪問し、施設を参観しただけでなく体育の授業を参観したり参加したりしたこと。
- ② 訪問先の体育責任者や指導者と面談し、現地の体育科教育の現状について情報を得たり、参考資料を得たりしたこと。
- ③ 留学生同士の交流を通して体育の現状や今後取り組むべき課題について議論したこと。
- ④ 米国の家庭・劇場・社交場・舞踊家や俳優の養成校などの見学を通して様々な種類のダンスを見聞したこと。

それは、視察前の我が国の体操科の以下の状況を改革する手立てとしての意味があった。

- ① 瑞体操を中心にした硬直的な内容であった。
- ② 行進遊戯領域は、不活発な教材が多い、まとまった作品としての教材が少ない、どんな教材を教えたらいかが明示されていない、という状況にあった。

朝輝は、米国のダンス教材の紹介と普及により、以下の①～④の観点から、行進遊戯領域の教材改革に取り組んだ。

- ① 多彩な領域から教材を採用する。
- ② 快活な歩法を中心に構成された教材を選択し、学習者の運動欲求を満たす。
- ③ 基本歩法だけでなく、その応用として伴奏音楽の楽譜と共に既成のダンス作品も採用する。
- ④ 学年と年齢に応じてダンス教材の教授細目を明示する。

これらの実施によって、彼は行進遊戯領域の指導における問題点を克服しようとしたのである。

V. 今後の課題

本研究は、朝輝記太留が何を動機と契機に行進遊戯領域の教材改革に取り組んだのか、その教材はどんなものだったのかについて明らかにした。

しかし、なお以下のような疑問が残されている。

- ① 朝輝が著書により紹介したダンス教材は具体的にどんな運動から構成されていたのか。
- ② 朝輝は、何を選択の基準として原典から教材を選択し、紹介したのか。またその事実から、米国の体育から何を取捨選択しようとしたのかについて推察できるものはあるのか。
- ③ 同時代の日本の体育研究者・体育指導者の体育ダンスに対する見解はどうだったのか。

よって、今後は、上記①～③の観点に立ち、朝輝の帰国後から大正15年の学校体操教授要目の改正前後までを研究対象として、米国ダンス教材の紹介過程の詳細と体育ダンスの普及過程を明らかにしたい。

注

- 1) 「体育ダンス」とは、体育を目的としたダンスの総称である。その内容には、フォークダンス・ジムナスティックダンス・アスレティックダンス・エセティックダンス・ナチュラルダンス等が含まれる。
- 2) ここでいう転機とは以下の二つの意味で用いている。すなわち、第一に、府立高等女学校から私立高等女学校の教員へと転身した朝輝の職歴の転機としての意味、第二に「4. 朝輝の著書にみるダンス教材の概要」で詳細に検討するように朝輝のダンス教材観の転機としての意味である。
- 3) 日本語表記は朝輝の原著の表記にしたがった。また、同校は女子の体操教員養成学校であるので、表2では、女子師範学校に分類した。
- 4) 大阪樟蔭女子大学が所蔵している朝輝記太留の旅券には、「右ハ教育視察ノ為北米合衆国及英領加奈陀へ赴クニ付通路支障ナク旅行セシメ且必要ノ保護扶助ヲ与ヘラレン事ヲ其筋ノ諸官ニ希望ス」と記されている。
- 5) 『米国体育視察記』には、トーダンス(バレエ)の授業を見学したと記されている。
- 6) 同書の「実施上の注意」に「此の演技は主として「ベビーダンス」(Babe Dance)「ポルカセリアス」(Polca Series)「バアンダンス」(Barn Dance)「ファウスト」(Faust)等の中より其

材料を採れり」と記されている。

- 7) 表3中の「フォークダンス風創作」と分類された3件は、いずれも朝輝がノルウェイのフォークダンス「マウンテンマーチ」を改作した「日本アルプスマーチ」である。
- 8) 朝輝の創作作品としては、「菊の薫」「扶桑行進」「敷島行進曲」が発表されている。このうち、「菊の薫」「敷島行進曲」は現時点では所在不明であり、本研究では入手できなかった。

引用・参考文献

- 荒木直範(1923) 体育と芸術. 国民体育. 日本体育会 9(3): 13-16.
- 朝輝記太留(1906) 凱旋舞. 森江本店: 東京.
- 朝輝記太留(1909) 六箇年小学校新遊戯法(再版). 文港堂: 京都・久榮堂: 大阪.
- 朝輝記太留(1918) 米国通信 第二信. 国民体育. 日本体育会 4(10): 14-15.
- 朝輝記太留(1919a) 米国通信 市俄古より. 新体育. 日本体育会 1: 13-15.
- 朝輝記太留(1919b) 故国女子体育の難関. 日米: サンフランシスコ. 2月16日付記事.
- 朝輝記太留(1919c) 矛盾だらけの日本女子体操. 新世界: サンフランシスコ. 2月16日付記事.
- 朝輝記太留(1919d) 米国通信 ロスアンゼルスにて. 新体育. 日本体育会 4: 16-20.
- 朝輝記太留(1919e) 米国通信. 新体育. 日本体育会. 6: 34-38.
- 朝輝記太留(1919f) 我が校の第一回運動会につきて. 新体育. 日本体育会 12: 48-53.
- 朝輝記太留(1921a) 米国体育視察記. 大鑑閣: 東京.
- 朝輝記太留(1921b) 学校体育の新教材. 大鑑閣: 東京.
- 朝輝記太留(1922a) 学校遊戯の教授細目的配当. 国民体育. 日本体育会 8(3): 27-29.
- 朝輝記太留(1922b) 体育材料としてのスクールダンス. 体育と競技. 大日本体育学会 1(7): 37-38.
- 朝輝記太留(1922c) ダンスの勃興は女子の福音. 体育と競技. 大日本体育学会 1(9): 69-74.
- 朝輝記太留(1922d) スクールダンスの勃興. 国民体育. 国民体育会 8(12): 12-17.
- 朝輝記太留(1924) 体育的学校ダンス. 出版者不明.
- 朝輝記太留(1926a) 行進遊戯新教本: 改正要目準拠. 大正書院: 東京.
- 朝輝記太留(1926b) 消息欄. 最新教材遊戯と唱歌. 学校遊戯研究会 1(3): 33.
- 朝輝記太留(1926c) ポルカ・スイリース. 最新教材遊戯と唱歌. 学校遊戯研究会 1(3): 34-44.
- 朝輝記太留(1927a) 学校ダンスの進むべき道程. 健康の女性. 日本女子体育協会 4(7): 21-25.
- 朝輝記太留(1927b) 小学校に於けるダンス. 体育と競技. 大日本体育学会 6(10): 16-18.
- 朝輝記太留(1928) 体育的学校ダンス(再版). 出版者不明.
- 朝輝記太留(1929) 扶桑行進. 山田謄写堂: 大阪.
- 朝輝記太留(1930) 扶桑行進. 青々書院: 大阪.
- 朝輝記太留(1930) 体育ダンスの父ギルバートに就いて. 体育と競技. 大日本体育学会 9(5): 24-27.
- 朝輝記太留(1937a) 唱歌遊戯・行進遊戯新教本上巻. 日進舎: 大阪.
- 朝輝記太留(1937b) 唱歌遊戯・行進遊戯新教本中巻. 日進舎: 大阪.
- 朝輝記太留(1937c) 唱歌遊戯・行進遊戯新教本下巻. 日進舎: 大阪.
- Burchenal, E. and Crampton, C.W. (1908) Folk dance music. G.Schirmer: New York.
- Burchenal, E. (1913) Dances of the people. G.Schirmer: New York.
- Crampton, C.W. (1909) The folk dance book. A.S. Barnes: New York.
- 大日本体育学会(1934) 第九回夏季体育遊技講習会広告. 体育と競技. 13(7): 巻頭.
- Elsom, J. C. and Trilling, B. M. (1919) Social games and group dances. J.B.Lippincott: Philadelphia.
- 学校遊戯研究会(1925) 最新教材遊戯と唱歌 1(3): 表紙裏.
- 飯塚晶山(1938) 朝輝記太留氏を悼む. 国民体育. 日本体育会 25(7): 13-16.
- 池田進他(1978) 大正の教育. 第一法規出版: 東京, pp. 343-397, 399-430.
- 入江克己(1993) 大正自由体育の研究. 不味堂: 東京.

- ヴァンダーレン・ベネット：加藤橋夫訳(1976) 新版 体育の世界史。ベースボール・マガジン社：東京，pp.394-396, 430-431, 453.
- 茅原崑山(1922) 体育即ち美育。国民体育。日本体育会 8(9)：6-16.
- 茅原崑山(1923) 体育即ち美育の一般原則。国民体育。日本体育会 9(1)：14-17.
- 木原成一郎(2007) 近代日本の体操科授業改革。不味堂：東京。
- 国民体育会(1919) 朝輝記太留氏帰朝歓迎会。新体育。1(4)：66.
- Kraus, Hilsendager, and Dixon (1991) History of the Dance in Art and Education (third edition). Prentice Hall: New Jersey, pp.292-302.
- 前原寅太郎(1927) 姿勢と美人。審美と体育。審美と体育社 2(1)：73-76.
- 前田幹夫(1994) 大正期の学校体育の研究—香西小学校の体育研究と実践—。不味堂：東京。
- 松本千代栄・香山知子(1981) 明治期の舞踏的遊戯—その精神と技術の様相—。舞踊学。舞踊学会 4：1-9.
- 松本千代栄・安村清美(1983) 大正・昭和前期の舞踊教育—「遊戯」から「ダンス」へ—。舞踊学。舞踊学会 6：10-13.
- 村山茂代(2000) 明治期ダンスの史的研究—大正2年学校体操教授要目成立に至るダンスの導入と展開—。不味堂：東京。
- 中野光(1998) 教育名著選集⑥大正自由教育の研究。黎明書房：名古屋。
- 中野篤一郎・朝輝記太留編(1910) 小学読本唱歌適用遊戯法。大阪開成館：大阪。
- 名須川知子(2004) 唱歌遊戯作品における身体表現の変遷。風間書房：東京。
- 成田十次郎他(1988) スポーツと教育の歴史。不味堂：東京，p.55, 85.
- 小田切毅一(1979) アメリカにおける先駆的スポーツ教育・ギュリック。体育・スポーツ人物思想史。不味堂：東京，pp.447-448.
- Ryan, W.S. (1922) チムナスチックダンシングに就て。体育と競技。大日本体育学会 1(9)：66-74.
- 櫻井匡(1927) 健康の美・品性の美。審美と体育。審美と体育社 2(1)：8-13.
- 柴田舜太郎(1927) 日本民族と体質改良の原理。審美と体育。審美と体育社 2(1)：4-8.
- 真行寺朗生・吉原藤助(1928) 近代日本体育史。浅見文林堂：東京，pp.454-460.
- 白川哲郎(2006) 『樟蔭学報』に見る昭和戦前期の樟蔭学園—樟蔭学園草創期資料のデータベース化とその活用(3)—。大阪樟蔭女子大学論集 43：230-244.
- 白川哲郎(2007) 新収集資料に見る大正～昭和初期の樟蔭学園—樟蔭学園草創期資料のデータベース化とその活用(5)—。大阪樟蔭女子大学論集 44：204-222.
- 鈴木明哲(2007) 大正自由教育における体育に関する歴史的研究。風間書房：東京。
- 竹之下休蔵・岸野雄三(1959) 近代日本学校体育史。東洋館出版社：東京，pp.92-93, 151-152, 182-184, 188-190.
- 寺岡英吉(1928) 体育ダンスの発達と女子体育(四)。最新教材遊戯と唱歌。学校遊戯研究会 3(5)：3-7.
- 富永たか(1923) 女性の肉体美。国民体育。日本体育会 9(1)：18.
- 富田彦二郎(1924) 体育と芸術。体育と競技。大日本体育学会 3(8)：31-36.

謝 辞

本研究をすすめるにあたって、大阪樟蔭女子大学のご協力をいただきましたことに感謝申し上げます。とりわけ、白川哲郎先生には資料の閲覧に際して多大なご助力をいただきました。ここに御礼申し上げます。

平成 24 年 3 月 8 日 受付

平成 24 年 8 月 31 日 受理